

# 絵巻『富士の人穴』（「常信筆絵詞之巻物」）について その一

田村正彦

## はじめに

『富士の人穴』は、室町時代に作られた御伽草子の一つで、富士山麓に実際にある溶岩洞窟を舞台とした、仁田忠常（一六七〇—一七〇三年）の異界巡歴譚である。（注）テキストは室町時代末の古写本の他、江戸時代には版本、奈良絵本、あるいは富士信仰の徒による写本群等、様々な形態となって伝わっており、バラエティーに富んでいる。

さて、そのような中で、この度、絵巻形式の『富士の人穴』を入手したので、ここに紹介する。決して状態のよいものではなく、また、内容も前半のみの不完全な形での伝来となっているが、絵巻という形式については非常に珍しいものだと思うられる。これ以外の作例としては、京都大学所蔵の『富士草紙』が知られているが、これは冊子本を解体し、絵巻に仕立て直したものであるから、厳密な意味での絵巻とはいえない

い。一方、本作品は、詞と絵を交互に配する、いわゆる一般的な絵巻物である。管見の限り、絵巻形式の『富士の人穴』は他には見られず、その意味では貴重な作例といえそうである。

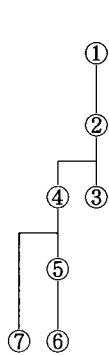
## 一、『富士の人穴』について

『富士の人穴』という作品が、いつ、どのように作られたのか、詳しいことはわかっていない。（注）『言繼卿記』（山科言繼の日記）によれば、大永七年（一五二七）一月二十六日の条に「ふしの人あなの物語」の語が見えるから、少なくとも十六世紀前半には知られていたものと思われる。現存する『富士の人穴』のテキストのうち、年代のわかるもので最も古いのは、鳥取県立博物館蔵の写本（慶長七年／二六〇二年書写）（注）である。その他にも慶長年間のものはいくつか知られているから、この時期、盛んに書写が繰り返されていたことが窺わ

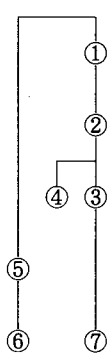
れる。<sup>(注四)</sup>

これに続くのは近世前期の版本であり、古活字版も含めると十七世紀の内に少なくとも七回出版されている。具体的には、①古活字版、②寛永四年版<sup>(一六二七)</sup>、③寛永九年版<sup>(一六三三)</sup>、④慶安三年版<sup>(一六五八)</sup>、⑤明暦四年版<sup>(一六五九)</sup>、⑥万治二年版<sup>(一六六二)</sup>、⑦万治四年版<sup>(一六六二)</sup>である。かなり集中的に出版が行われていたことになろう。これら版本の本文については、漢字の当て方や表現に多少の違いが見られるものの、基本的に大きな相違はない。但し、④慶安三年版にはおよそ一丁分の脱文が見られ、以降の版本にもそれが引き継がれてしまっている。挿絵については、④慶安三年版で大幅に手を加えられ<sup>(注五)</sup>、また、⑤明暦四年版でも刷新されている。これらの系譜はやや複雑であるので、以下に本文と挿絵の系統図<sup>(注六)</sup>を示しておこう。

【本文】



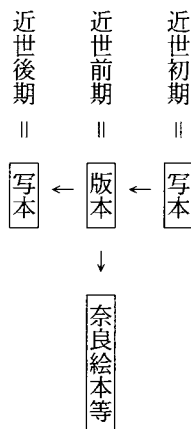
【挿絵】



さて、普通は版本化されることでテキストの形式的な変遷は終わりを告げるのだが、この『富士の人穴』については、

少々事情が違う。端的に言えば、近世の後期になると富士講の信者達が書写を繰り返し返したために、大量の写本が現代に伝わっているのである。これは書写による功德が強調されたことに要因があるのだろう。およそ十八世紀から十九世紀にかけてものがほとんどであるが、中には近代に入ってからのも例も見られる。

また、それら「信仰のための書」とは別に、奈良絵本などの絵入豪華版も作られた。版本の本文と絵をもとにした、手描きによる一点ものである。したがって、テキストの変遷をまとめれば、次のようになろう。



今回紹介する絵巻は、「奈良絵本等」のあたりに位置付けられるべきものではないだろうか。つまり、既成の版本のテキストと挿絵を利用した、手描きの作品のひとつということになろう。但し、先述の通り、絵巻形式の『富士の人穴』は、管見の限り本作品だけである。

## 二、絵巻『富士の人穴』の解説と翻刻（前半）

本絵巻（紙本著色）は、二〇一九年六月に大分県の古物商から入手したものである。表紙部分の題簽には「常信筆絵詞之巻物」とあるが、内容から見て『富士の人穴』の伝本のひとつであることは間違いない。旧蔵者は、佐賀大学初代学長の西久光氏である。残念ながらすでに他界されているので、伝束等については現在のところ不明である。法量については以下の通りとなる。

縦 二七・七センチメートル。

横 一五・一メートル。

図 九 図



本紙の最後の部分には「常信」の印が押されている。但し、奥付がないことから、中巻、もしくは下巻の存在が想定される。

翻刻に際しては、可能な限り原文通りに記すことを心懸けたが、便宜上、句読点を加えてある。また、漢字は概ね現行の字体に改め、本文の誤りが疑われる箇所には、右傍に（ママ）と記した。「本文」の他に、「口語訳」、「語釈」、「絵」の解説等も付けた。

### 「本文」

抑正治元年四月三日と申に、頼家のかうの

殿、和田の平太をめして仰けるは、いかに平太承れ。むかしよりをとに聞富士の人あなと申せ共、いまた聞たるばかりにて見ること

のさらになし。されば此あなにいかなるふしぎなることの有らん。なんぢ入て見て参れと仰有ければ、かしこまりて申やう、是は

おもひもよらぬ一大じの御ことを仰けるものかな。てんをかくるつばさ、地をはしるけ

たものをととりてまいらせよとの仰にて候は、いとやすき御ことにて候へとも、是はいか、候べ

きやらん。いかにしてひとあなへ入て又二た、ひともたち返る道ならばこそと申あげけれ

ば、頼家かさねて是非共と仰ければ、御意をそむきがたくて、二つなき命をはきみに

参らせんとりやうしやう申、御前こそた、れける。

### 「口語訳」

さて、正治元年四月三日と申す日に、頼家の督殿が和田の平太を召し寄せておっしゃることには、「おい平太、聞くのだ。昔から噂に聞く富士の人穴と申すものがあるが、いまだ人づてに聞くだけで一度も見ることがないのだ。だから、この穴の中にどのような不思議なことがあるのだろうか（と思っ

ている）。お前、穴に入って見てくるのだ。」との仰せがあつ

たので、(和田の平太が)平伏して申し上げることには、「これは思いもよらない大変な任務をご命令になったことではない。空を飛ぶ鳥や、地を走る獣を捕ってこいという仰せでしたら簡単なことでございますが、今回のことはどのようなようにいたしましたらよいのでしょうか。なんとかして人穴へ入って、再び地上に戻ることができるようでしたら(行くのですが)。」と申し上げたところ、頼家は重ねて「ぜひとも(行ってくれ)。」とおっしゃるので、命令に背くことはできず、たった一つの我が命は主君に差し上げようと(覚悟を決めて)了承申し上げ、御前から退出した。

#### 【語釈】

「正治元年四月三日」一一一九九年四月三日。『吾妻鏡』では、建仁三年(一一二〇三)六月一日の条に、伊東崎の洞窟(現伊東市の「穴の原溶岩洞穴」か)探検の記録が見られる。それによると、源頼家の命で和田胤長が洞内に入り、大蛇を退治したという。

「頼家」＝源頼家。父頼朝の死後、鎌倉殿の地位を引き継いだ。

「かうの殿」＝「督かみの殿」のウ音便。正治二年(一一二〇〇)、源頼家は従三位左衛門督となっており、「督の殿」と称した。

「和田の平太」＝和田胤長。義長の子で、義盛の甥にあたる。

#### 【絵 01】

源頼家と和田胤長(和田の平太)の対面の場面。頼家の

邸宅を斜め上から俯瞰する構図で描かれている。対面の部屋には、頼家と胤長の他に、侍が五人、小姓が一人控えている。また、部屋の外にも侍が四人見える。寝殿造(主殿造)の庭には池があり、中島に松が植えられている。板塀越しには柳の木が描かれ、隙間からは赤い花も見えている。

#### 【本文 02】

義盛よしもりのしゆくしよに参り、きこしめせ、平太こそ君の御のそみを承うけたまはりて富士のひとあなへ入申候とまふす。よしもりきこしめし

それ大事の御のぞみや。自然のこの有ならば、しせんずるは一定なり。人をもつれて行へき道にあらず。たゞ一人いるへきとなみたをなかし給ふ。やゝ有て義盛おほせけるは、あひかまへて平太との高名し給へ。われくが一もんの名ばしくたし給ふなど

仰せければ、承り候とてなみだをうかべて有ける所に、あさいなの三郎来りてこのよしを見る

よりも、四しやく八寸ありけるいかものつくりの太刀をはき、はゞきもと四五寸くつろげひざのうへにかきのせ、平太をはたとらんで、なんぢほとおとこがましきもの世にあらじ。日本

国の諸さふらひの見る処にて、なきがほ人に

見することこそみれんのしだひなり。あれ程のおくびやうものを一もんの中にをけば、それにひかされておくびやうになると申こと有。そのもと罷たてと申。平太きゝて、いかにあさいなどの、おくびやうなりとも人あなを見ずは罷帰るまじき也。御心やすくおぼしめすべし。

あさいなどの、とて出にけり。あさいな聞てからくとうちわらひ、されとも平太どの、はし

るむまにむちといふことあり。千しほに染る

くれないもそむるによつて色をます。なにがしも

みつきたくは思へとも、たゞ一人さゝれたるあいだ

みつかぬなり。あひかまへてこのたびは高名

をしてわれくが一もんの名をあげ給へといふ。

#### 【口語訳】

(平太は)伯父の義盛の屋敷に参上し、「お聞きください。

私平太は主君頼家様のお望みを承り、富士の人穴へ入ることになりました。」と申し上げた。義盛はこれをお聞きになり、

「それは容易でないご希望であるなあ。万が一のことがあれば、死ぬのは確実であるよ。家来を連れて行くべきではある

まい。お前一人で入らなければならぬぞ。」と言って涙をお流しになる。しばらくの沈黙の後、義盛がおっしゃること

には、「全力を尽くして、平太殿よ、手柄をお立てなさい。どんなことがあっても我々一門の名譽を傷つけないなさい。」

とおっしゃったので、(平太は)「承知しました。」と言って

涙を浮かべた。するとそこに従兄弟の朝比奈三郎義秀がやっ

て来て、この様子を見るやいなや、四尺八寸もある厳めしく

作った太刀を腰に下げ、鍔元を四五寸緩めて膝の上に載せ、

平太をぐっと睨んで、「お前ほど男らしい者はこの世にいな

いはずだ。(それなのに)日本の侍たちが見ている前で泣き

顔を見せるなど、まことに残念なことだ。こんな臆病者を一

門の中に置いておくと、それに影響されて臆病になる者が出

てくるやもしれぬ。お前などさっさと出て行け。」と申し上

げる。平太はそれを聞いて、「なんとまあ、朝比奈殿よ。い

くら臆病であっても、人穴を探索せずに立ち戻ってくることは

ありませんぞ。ご安心なさいませ、朝比奈殿。」と言って

出て行こうとした。朝比奈はそれを聞いて、からからと声を

立てて笑い、「しかし、平太殿よ。走る馬にさらに鞭を打つ、

ということもある。あるいは、何度も染めた紅の色も更に染

め続けることでより鮮やかな色となるのだ。だから、私も支

援したいとは思うのであるが、ただ一人、お主が任命されて

いる間は支援しないでおくぞ。力を尽くしてこの任務で手柄

を立てて、我々一門の名をあげなさいませ。」と言うのであつ

た。

#### 【語釈】

「義盛」||和田義盛。胤長の伯父にあたる。源頼朝に仕え、

幕府の重臣の一人となるも、最後は北条氏に亡ぼされた(和

田合戦)。

「あさいなの三郎」 朝比奈三郎義秀。和田義盛の三男。胤長の従兄弟にあたる。

「いかものつくりの太刀」 〓 「巖物いかにものづく作りの太刀」。外装を敵めしくこしらえた太刀。

「はゞきもと」 〓 刀剣などのつばもと。

「みれんのしだひ」 〓 「未練の次第」で、ここは「まことに残念なことだ」と理解しておいた。但し、「未熟者がすることだ」とも解釈できるか。

「はしるむまにむち」 〓 「走る馬に鞭」。よい上にもさらによくすること。

「千しほに染るくれないもそむるによつて色をます」 〓 よいものでも、さらに心を配ることで、より立派なものになる。

〔絵 02〕

和田義盛と胤長の対面の場面。胤長が義盛の屋敷に参上し、頼家から人穴探索の命を受けたことを報告している。それを聞き、義盛は涙している。また、従兄弟の朝比奈三郎義秀がすぐんでいる様子も躍動的に描かれている。胤長の姿は、その義秀に対して返事をしているところなのであろう。部屋の外にはその様子をみている侍二人が描かれている。非常に本文に忠実な描写と言える。また、別の部屋では、刀の手入れをする武士が三人描かれている。武家の屋敷であることを描き出そうとした工夫であらう。

〔本文 03〕

平太か其日のしやうぞくは、いつよりもはなやかなり。はだには白きかたひらのわきふかくとかせ、みなしろおりて一かさね、中白のひたたれのみすそをむすんでかたにかけ、はかまのくゝりを高くゆい、しろかねのとうかねに、あかぎのつかにきんぶくりんかけさせ、だみたる扇さしそへしやくだう作りの太刀二ふりかさねてはき、たい松十六もたせ、人六人つれてきみの御前に参りて、御いとまと申、諸国の侍達へ暇申、「三日と申むまの刻に帰り申へし。それすき候は、いはやにてしゝたるとおほしめせ」と申。すてに岩屋へ入にけり。諸人はを見て「あつはれ弓矢とりのならひほと世にあわれなることはなし」とみなくゝ申許なり。

〔口語訳〕

平太の出発の日の衣裳は、いつもより華やかである。肌には白い帷子で脇を深く解かせたものを着て、その白い単衣を折つてもう一重ねし、中白の直垂の裾を結んで肩に掛け、袴の括りを高く結び上げ、銀の胴金を付けた赤木作りの柄に金覆輪を施し、彩色された扇を持った上で、赤銅造りの太刀二本を重ねて腰に差し、松明を十六本持たせて、六人の部下を連れて頼家の御前に参上し、行って参りますと申し上げ、諸

国の侍たちにも次のように別れの挨拶をした。「三日後の午の刻に帰ってくるつもりであります。もしその刻限を過ぎましたら、岩屋の中で死んだものとお思いくだされ」と申し上げた。そうしてあっという間に岩屋へ入っていった。周りの人たちはこの様子を見て、「ああ、武士のしきたりほどこの世に感慨深いものはないよ」とみな口々に申すばかりである。

〔語釈〕

「みなしろ」||「皆白」。全部白色であること。

「中白」||中央の部分が白いこと。

「とうかね」||「胴金」。刀の柄、鞘の合わせの割れるのを防ぐためにはめた幅広の鐙。

「あかぎのつか」||「赤木の柄」。刀剣の柄を、漆を塗らな

いで赤地のままの花欄の材で作ったもの。

「きんぶくりん」||「金覆輪」。覆輪の一種。装飾として金で縁取りしたもの。

「しやくだう作り」||「赤銅造」。刀剣の装飾品を赤銅で作ったもの。

〔絵 03〕

和田胤長の出発の場面。画面右端に見えるのは、頼家の邸宅なのである。侍の姿が四人確認できる。中では、胤長が出発の挨拶をしているものと思われる。その左側には、諸国の侍たちが十人おり、胤長の出発を見送っている。当の胤長は、本文の内容通り、中白の直垂を身に纏い、赤木で金覆輪

を施した刀を腰に差し、扇を持った姿で描かれている。また、その先の松林には、六人の部下が松明や武器を持って控えている。画面左端には駿河湾が描かれ、さらにその先にはこれから向かう富士山が見えている。

〔本文 04〕

さて岩屋のうちへ一町はかり入て見れば、口よりくわゑんを出したるくちなは、すのこをかきたることくなり。それをとびこへく行てみれば、なまくさき風吹ておそろしきことかきりなし。かたわらを見れば、年のよはひ十七八なる女ばう、十二ひとへをひきかさね、紅のはかまをふみしたきて三十二さうを具足して、たけなるかんざしはせひたいかたていたにこうろきの墨をすりなしかしたることく也。白かねのはたあしに、こかねの樋をもつてはたをおり給へり。かりうびんなるこはねにて「なにものならば、わかすみかへきたれるぞ」と有ければ、平太承り、「かまくら殿より御使に三浦の一ぞく和田の平太と申ものにて候」と申。女ばうきこしめし、「たとへなへのつかひなりとも、みつからが前をは通すまじき

なり。それをおかしてとをるならば、たちまちに命をとるへし。是より帰り給へ。みつからは恨み給ふなよ。それをいかにと申に、なんぢはすでに仏法にてきをなしたりし

守屋の大臣には九代の末也」とおほせも

はてぬに、いはやおくより風ふきいて、一もみもんで吹かと思へば、たち所もたま

らず、岩屋の口へふきいだされて、おほわらには吹みだれてや、やう／＼たちあがらんとする所に、

### 〔口語訳〕

そうして、岩屋の中へ一町ほど入ってみると、口から炎を吹き出している蛇が、簀の子をかぶせたようにたくさんいる。それを飛び越え飛び越え進んでゆくと、生臭い風が吹いてきて、恐ろしいことこの上ない。ふと傍らを見ると、年の頃は十七八歳の女性がいる。十二単を重ね着て、紅色の袴を踏み乱して、一切の美しさを兼ね備え、身の丈ほどもある髪の毛は、青黛の色をした立板に、さらに香炉木の墨を摺り流したように黒く美しいのである。(女性は)銀製の機織り機で、金の杼を使って機を織っていらっしやる。そして、迦陵頻伽のような美しい声で、「何者だといって、私の住処へやっ来て来たのだ(お前はいった誰で、どうして私の住処にやっ来て来たのだ)」というので、平太はそれをお聞きして、「鎌倉殿

(頼家)からのお使いで、三浦一族の和田の平太というものでございます」と申し上げた。女はそれをお聞きになり、「たとえ誰の使いであっても、私の前を通すわけにはいかないのだ。その掟を破って通るといふならば、すぐにお前の命を取ってやろう。ここからお帰りなさい。決して私を恨みなさるなよ。どうしてこんなことを言うかと言えば、お前はすでに仏法に刃向かってしまったのだ。守屋の大臣の九代末の子孫なのだから」と仰せ終わらぬうちに、岩屋の奥から風が吹いてきて、一回激しく吹いたかと思うと、立っていることができずに、岩屋の入口まで吹き出されてしまい、髪も衣服も吹き乱れて、何とか立ち上がろうとするところに、

### 〔語釈〕

「ふみしだく」 強く踏む。また、裾を踏みつけて歩く。

「三十二さう」 三十二相。仏の身に備わる三十二種の美しい姿や形。転じて、女性の理想的な美のすべて。

「たけなるかんざし」 丈なる髪。身の長に余るほどの長い髪。豊かな髪。

「せひたいかたていたにこうろきの墨」 「青黛が立板に香炉木の墨。青黒色の立板に流した香り高い墨。美しい黒髪の形容していったもの。

「はたあし」 機足。機織り機。

「杼」 機織用具の一つ。

「かりうびん」 迦陵頻伽のこと。雪山あるいは極楽浄



土にいる想像上の鳥。美しい声で法を説くという。

「三浦の一ぞく」 〓和田氏は、相模国を拠点とする三浦氏の一族。

「守屋の大臣」 〓物部守屋のこと。仏法を排斥することを主張し、蘇我馬子と対立した。

#### 〔絵 04〕

胤長の洞窟探検の場面。画面右半分は、口から炎を吐く蛇の大群に遭遇したところである。松明を持った部下たちがそれを照らし出している。画面左半分は、機を織る女に追い返されるところである。長い黒髪の女が十二単を着て機織り機に腰掛け機を織っている様子が描かれている。胤長たちは大風に吹かれ、入口側に追いやられている。

#### 〔本文 05〕

岩屋のうちよりからひたるこゑにて

「なんぢか年は十八歳也。三十一といはんはるのころ、しなのゝ国の住人、和泉の

三郎と申ものにかたらひて、ゆへな

きむほんをおこしてうたれんことは

一定なり」とよばわりて、雷電しけれ

は、おそろしことかきりなし。さて岩

屋より罷帰<sup>ひらへり</sup>りて、かまくら殿へ参り、此由を申す。いはやのふしき共さまゝに

申ければ、

#### 〔口語訳〕

岩屋の奥の方からしわがれた声で、「お前の年は十八歳であるな。三十一歳になった春の頃、信濃国の住人である和泉の三郎と申すものと結託して、深く考えもせず謀反を起こして討たれることは、確かなことであるぞ」と大声で言い、雷電が起こったので、恐ろしいことこの上ない。そうして岩屋から退出して帰ってきて、頼家のもとに参上し、事の次第を申し上げる。岩屋での不思議な出来事を様々に申し上げると、

#### 〔語釈〕

「和泉の三郎」 〓泉親衡のこと。源頼家の遺児（千手丸）を將軍に擁立し、北条氏の打倒を計画したが、事前に露頭し失敗に終わった（泉親衡の乱）。この際、胤長も捕らえられている。

#### 〔絵 05〕

頼家への報告の場面。洞窟から出てきた胤長が、頼家の屋敷へ参上し、洞窟探検の結果を報告している。扇を持った頼家は、身を乗り出して聞いていている。簧の子の上にいる侍たち四人も、興味深げである。

おわりに

本絵巻は、江戸時代の版本をもとにして作られている。絵を挿入する箇所は、寛永四年版（もしくは古活字版）と一致

しており、図柄についても、版本の挿絵を基本としつつ、絵巻の特性を生かした豊かな画面が構築されている。また、和田胤長にすぎむ朝比奈三郎義秀の躍動感や、版本には描かれない機を織る女の姿などからは、絵師の工夫が感じられる。

残念ながら紙面の関係で、今回は前半の第五段までの紹介となる。後半部分は、次号に譲ることとしたい。また、この絵巻は、本来は上中下三巻、もしくは上下二巻からなっていたはずである。そうであれば、本絵巻に続く巻があるはずであるが、その所在はわかっていない。内容的には、物語後半の仁田忠常が地獄めぐりをする場面であるから、壮大な地獄絵図が展開しているに違いない。いったいどのようなものであるのか。実に興味深いところである。

注

(一) 物語の梗概は、以下の通りである。鎌倉時代の初め、和田平太胤長は、將軍源頼家の命を受け、富士の人穴を探索することになった。穴に入ると十二単を着た機を織る女房に出くわし、将来を予言されるや、大風が吹き、追い出されてしまった。頼家は、その報告では満足できず、更なる探索者を求めた。すると、伊豆国の住人、仁田忠常(忠綱とも)が名乗りを上げ、褒美と引き換えに人穴に入ってしまった。しばらく進むと巨大な毒蛇が現れ、行く手を阻んだ。忠常が頼家から賜った太刀を献上すると、毒蛇は童子姿へと変化し、浅間大菩薩であることを告げた。そして、娑婆の連中は地獄の存在を信じていないようだから、お前にそれを見せてやろうと言い、

忠常を連れて六道の世界を見て回る。すべての世界を見終わった後、その証拠として金の草紙を賜る。もし地獄極楽を疑うような者がいたらそれを見せよ、決して自ら語ってはならない、と告げられた。穴から帰還後、忠常はすぐさま頼家に報告をするが、語り終わらないうちに、頼家もろとも命を失ってしまった。

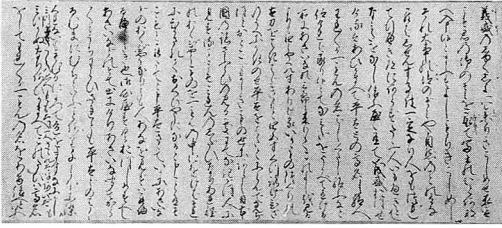
(二) この話の原話は『吾妻鏡』に見られ、建仁三年六月一日から四日までの記事によると、一日、和田平太胤長は伊東崎の洞窟(伊東市の「穴の原溶岩洞穴」か)に探索に入り、大蛇を退治するという。また、三日から四日にかけては、新田忠常が今度は富士の人穴の探索に出かけ、洞窟内の大河の先に「奇特」(浅間大菩薩か)を見てしまう。部下四人がたちまちに死んでしまい、忠常は頼家から拜領した剣を河に投げ入れ、命からがら逃げ出したとなっている。「富士の人穴」は、この二つの探検譚をうまくアレンジし、また、地獄極楽めぐりの要素を取り入れて、作られたのだろう。

(三) 「鳥取県立博物館蔵『富士の人穴草子』翻刻と解題」、原豊二氏、『山陰研究』第二号、二〇〇九年二月。

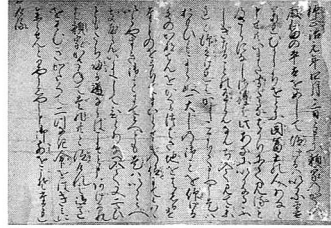
(四) 赤木文庫旧蔵『ふじの人穴』は慶長十二年(一六〇七)の書写。また、石川透氏によれば、慶應義塾図書館所蔵の『人あなさうし』は室町時代後期の書写であると指摘されているから、慶長期をさらに遡る写本である可能性がある。

(五) 特に第十図(養の河原)以降の図は、様々な要素が描き加えられている。

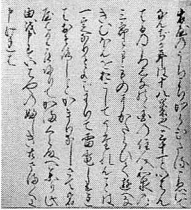
(六) この系統図は、『京都大学蔵 むろまちものがたり 第一巻』(臨川書店、二〇〇〇年)の本井牧子氏のを参照した。



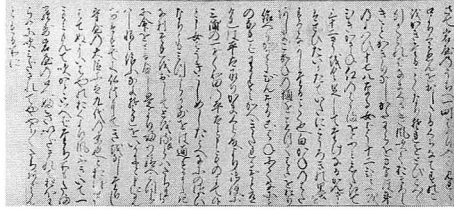
本文02



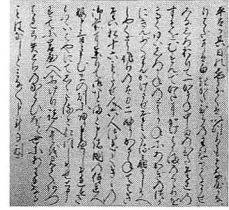
本文01



本文05



本文04



本文03

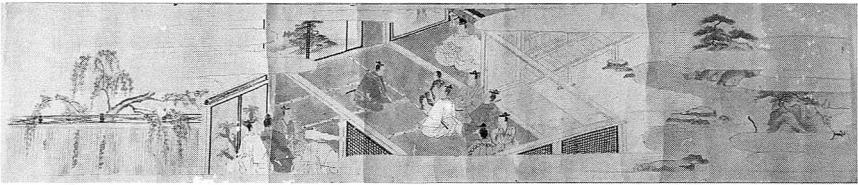


図01 (横122cm)

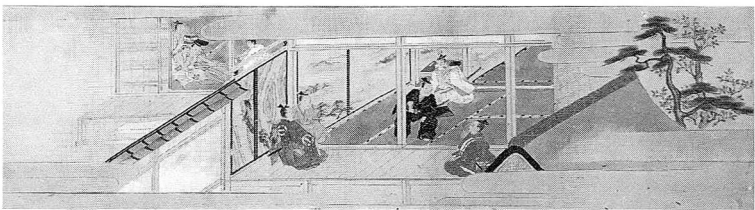


図02 (横91cm)



図03 (横150cm)

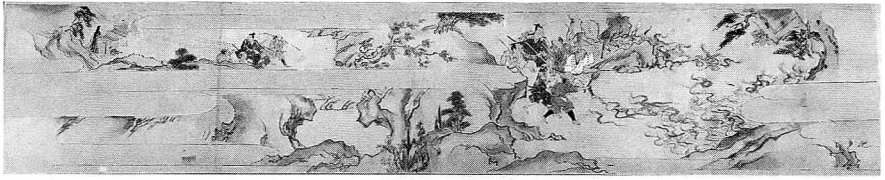


図04 (横126cm)

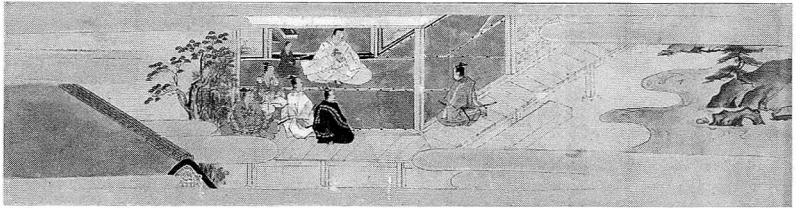


図05 (横94cm)



図02部分 (義盛/義秀/胤長)



図01部分 (頼家との対面)



図03部分 (駿河湾と富士山)



図03部分 (胤長出発の姿)



図04部分（洞窟内の蛇の大群）



図04部分（機を織る女）

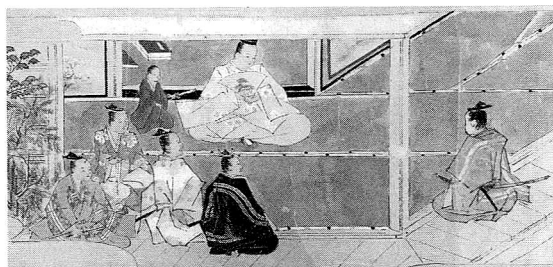


図05部分（頼家への報告）